

シャクヤクのさし木繁殖と繁殖株利用法の開発

第1報 節位別繁殖性能について

有野 賢三・水越 洋三・畠山 順三

(秋田県農業試験場)

Propagation by Leaf-Bud Cutting and Development of the Method
by Utilizing of Rootingstocks in Peony

1. Propagation ability of the leaf-bud cutting from different nodes of plant

Kenzo ARINO, Yozo MIZUKOSHI and Junzo HATAKEYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 ま え が き

シャクヤクは、冷涼地において品質の優れた切花が生産されることから、県下ではその特産化が期待されている。これまでシャクヤクの繁殖は、株分けによって行われてきたが、この方法では繁殖効率が低く、また、線虫が持ち込まれるため、急速に生産力ならびに品質の低下をきたす。これらの問題を解決するために、さし木による繁殖技術の確立とさし木苗利用による新しい栽培法の開発につとめている。さし木は葉芽さしとし、とくに塊根、クラウン形成条件の解明にあたりとともに、養成した苗の利用については集約的な切花栽培や鉢物栽培への展開をはかるため、一連の試験を行っている。本報では、節位別の繁殖性能について報告する。

2 試 験 方 法

1 試験区

- (1) さし木時期： 4月17日、5月16日、6月21日、7月25日の4時間とした。
- (2) 供試株： 4月17日さし区は3月下旬に開花株のブラインド茎、5月16日さし区は4月下旬に開花株のブラインド茎、6月21日さし区は6月中旬に開花株（露地季咲き）の開花茎、7月25日さし区は6月中旬に開花株（露地季咲き）の開花茎を、それぞれ供試した。
- (3) 採穂部位： 地際から切り取った茎について、4月17日さしおよび5月16日さしでは第1～8節、6月21日さしおよび7月25日さしでは第1～7節まで、各節の直下で切り、葉を一枚つけた状態のさし穂を調整した。

2 供試品種：“サラベルナール”

- 3 耕種概要： 培地は山砂を用い、発根促進剤として α -NAA (0.4%) 粉剤を粉衣処理した。

鉢上げは、4月17日さしで6月29日、5月16日さしで

7月24日、6月21日さしで9月11日、7月25日さしで10月2日に行った。

材料は鉢上げ後、露地で管理し、9月13日に施設内に搬入した。11月12日から最低気温10℃になるように加温した。

3 結果および考察

発根率は全般的に良好で、平均65～75%であった。節位別にみると、4月17日さしでは第4・6節位、5月16日さしでは第5・6節位、7月25日さしでは第5節位でそれぞれ劣った。このように全体を通じて中位節で劣る傾向がみられた。また、4月、5月の早期さしに比べて6月、7月の晩期さしで優る傾向がみられたが、供試株の栽培条件のちがいが影響したように考えられる。

発根数は6月21日さしで最も優り、次いで5月16日さし>7月25日さし>4月17日さしの順となった。また、節位別にみると、4月17日さしでは第4・6・7節位、7月25日さしでは4・5・7節位で劣った。その他のさし木時期では、特異な傾向はみられなかった。

根重については、発根数とはほぼ同様な傾向を示した。

クラウン（新芽）は4月、5月さしで発生がみられたが、6月、7月さしではほとんど発生しなかった。

表1 発根調査

項目	4/17 a		5/16 b		6/21 c		7/25 d	
	発根率 (%)	発根数 (本)	発根率 (%)	発根数 (本)	発根率 (%)	発根数 (本)	発根率 (%)	発根数 (本)
節位								
第1節	76.7	37.4	81.8	80.0	68.4	1,570	46.7	46.8
2	66.7	16.4	30.8	86.7	32.6	1,024	70.0	91.4
3	89.7	18.4	700	83.3	51.5	1,720	62.4	72.2
4	23.3	8.5	57	90.0	43.3	1,212	70.0	38.6
5	90.0	14.4	254	26.7	15.0	433	96.7	51.5
6	36.7	8.6	94	50.0	45.5	1,477	80.0	51.0
7	66.7	7.3	152	80.0	28.3	750	70.9	32.0
8	86.7	14.2	252	73.3	42.2	1,246	—	—
平均	65.8	15.7	330.1	65.0	41.0	1,179.0	71.1	54.9

注: a: 6/29, b: 7/24, c: 8/11, d: 10/2調査

4月さしにおいては、9月上旬には、クラウンの形成がほぼ完了したことが認められた。形成率は下位節の60～90%に対して、中・上位節では20～40%と低かった。5月

表2 節位別・クラウン形成率の比較

節位	さし木時期	4/17挿 (%)	5/16挿 (%)	6/21挿 (%)	7/25挿 (%)	平均 (%)
1		87.5	27.3	14.3	0	32.3
2		66.7	53.4	0	0	30.0
3		66.7	6.7	0	0	18.4
4		25.0	37.5	0	0	15.6
5		40.0	0	0	0	13.3
6		20.0	27.3	7.1	0	13.6
7		41.2	40.0	0	0	20.3
8		30.0	37.5	—	—	33.8
平均		47.1	28.7	3.1	0	

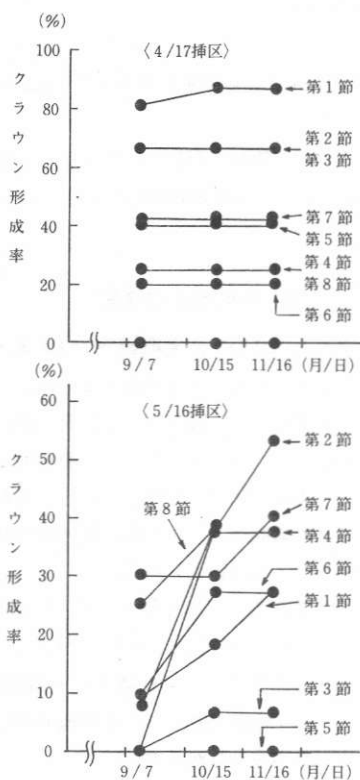


図1 時期別・クラウン形成経過

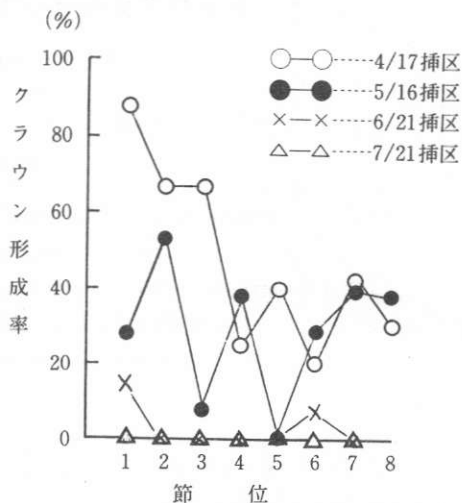


図2 さし木時期別クラウン形成率

さしでは、全体的に低く20~40%であった。なお、7月さしでは、鉢上げ後、葉が黄変し、やがて枯死したため、クラウンの形成がみられなかった。

以上の結果、シャクヤクはさし木による繁殖が可能であり、採穂部位としては下位節がよく、さし木時期は、なるべく早い時期が適当であると考えられる。

4 ま と め

シャクヤクをさし木繁殖する場合には、いかにしてさし穂にクラウンを形成させるかが重要なポイントであり、そのためには、できるだけ早期にさし木を行うこと、さし穂を低節位から採取することがよいと考えられた。

なお、さし穂を露地栽培した株から採取すれば、容易にしかも大量に確保できる。しかし、これを対象にした晩期さし(6月以降)ではクラウン形成率が極端に低下するので、この方法については、今後さらに検討する必要がある。